

1. 商品経済と「共同体」の解体

菅野俊作（東北大学）

山村の古い経済と社会の構造は、地すべりの人口の過疎化に象徴されるように、いままさに崩壊に直面している。東北地方に限らず農地改革前の山村では、基本的には、雑穀を中心とした自給的な農産の上に、馬産（一部は牛産）を中心とした畜産と、製炭を中核とした林産が生計の手段であった。こうした生産の発展段階では、耕地の賦役（労働地代）や刈分小作、家畜の仔分けや分収貸借、製炭の焼子や分収造林など総じて前期的な生産関係が一般的であった。そしてこれらの生産には家の自立に先行する農林家の集団として、「共同的」な生産の生活組織（都落契約講）がなお強固に存在していた。

従って、農耕地の解放に限定された農地改革の成果も、平地農村のように劇的なものになかったから、二十年代を通じて上記の基本的な生産上の諸性格はなお継承されていたといえよう。これが急激に解体し始めるのは、二十年代の半ばを起点とする治山治水、電源開発などの公共事業の発展、軍馬需要の減退、農機具及び化学工業の発展に伴う馬産と製炭という二大生業の潰滅的な打撃を契機としてであるが、基本法農政の発展契機となったMSA体制、三十年

後半からの経済高度成長を背景とした総合開発、大都市を中心とした爆発的な労働力需要の増大、四十年代後半からの米の生産調整および新全総による地域開発と工業化政策の展開は、これをさらに決定的なものとした。

この間、山村は一般的には、受動的に混乱をくり返してきたにすぎなかったが、なかには大規模な開田、その省力化、特産物主産地の形成、酪農や食肉牛による畜産振興など、内生的な農業生産力の発展をバネにして、経済と社会の構造を再編成していった事例も少なくない。これに対して、こうした生産力の内生的な発展がないままに、西南型の挙家離村、水稲単作村の季節出稼ぎ、都市近郊村の日雇い賃労働者化など、タイプが異なるとはいえ、労働力の商品化に結果していった事例が多い。ここでは、新たな社会を発見することなく、古い生産と生活の組織を失いつつある。

例えば、当村研鳴子大会で二十年代までの経済と社会の基本構造を報告した、同町鬼首地区をほぼ一〇年間隔で調査してみると、まず二十年代の治山治水、電源開発（二十七―三十二年の鳴子ダムの建設がそのシンボル）を契機として、従来の国有林労働は公共事業の賃労働に転換しつつ、三十年代の「全総」に基づく開発（四十年の国道仙秋ラインの縦貫に集約）に対応して、それが男・女を問わず全村的に普及し、現在では約九九%の農林家が人夫・日雇いに従事するにいたっている。四十年代から集中的に農林業の近代化諸事業が実施されたが、これによって農林業の近代化を実現するどころか、この事業自体によってかえって村内の賃労働化が促進された結

果となっている。そして、四十年代後半から、大手のM地所が観光開発のため約一、〇〇〇haの用地の買収に着手した。まず労働力を売った農民は、続いて生活と生産の基盤を売ることになり、山村の経済と社会は将来の方向を見出すことなく、急激な解体に直面し、外来的な大手資本のもとに再編成されようとしている。馬産を通じて陸軍に、製炭原木を媒介にして国有林に支配されてきた農民は、いま独占資本の下に従属させられようとしているわけである。

もっとも、自然経済的な生産と生活の組織である「共同体」的な組織は、商品経済の浸透によって、岩手県煙山村の如き山村でも、幕末期にすでに機能的に分化し、また内部的にも分解しつつあったが、また、宮城県遠田郡のような水稲単作地帯では、明治中期の大規模な水田造成と耕地整理事業に伴い、個別商業的生産に移行したのを契機に解体し、新たに地主を中核としたいわば縦の組織に転換している。また、青森県弘前市の旧千歳村のようにりんご地帯では大正末期・昭和初期に、そして、山形県西村山郡西川町の林業地帯ではやはり同期に、それぞれ部落有林野の村有基本財産への統一と内部分割を契機にりんごおよび杉の個別植栽によって解体を開始している。

このほか、われわれは東北地方のいくつかの村落構造について調査を行ない、二十年代までの実態を明らかにしたが、これらの代表的な事例をとりだし、その後の発展方向を三つの類型別に比較してみると、その一つが、俗に岩手県のチベット地帯といわれる地域で明治前期に法認された巨大な地頭有牧野が、大正末期に地頭の「ユ

ンカー」的な林業経営地として囲い込まれたため、局限された農民的利用地をめぐって、激烈な山林争議をひきおこした。しかし結局前期的な山名子・焼子や牛馬小作制度の再編成基盤に転化した。しかし農地改革である程度解放された結果、牧野は耕地や林地化しつつ前期的な諸制度も急速に解体方向をたどっている岩手県山形村の類型である。もう一つは、膨大な牧野が明治前期に国有地に編入され、明治後期からの造林の進展に伴い、牧野は縮小の一途をたどり大正中期に限定牧野として局限されたが、村内の有利な農産物・賃労働市場（全国第一位の硫黄鉱山）に恵まれたため、商業的な農・畜産（酪農）業が発展した結果、牧野解放を契機に、自然牧野は急速に個別所有化し商業的農・林業の発展基盤となるか、あるいは酪農の基盤たる栽培牧野に転化した岩手山麓の松尾村の類型である。この類型は戦後かなり一般性をもつものといえる。これに反して、農地改革後もなおきわだった内生的な生産力の発展もないままに、山村構造の典型的・原形的な形態を残していたのが、すでにのべた鳴子町鬼首地区であったが、三十年代からのこの解体過程はすでに抄記したとおりである。

そこで、「資本主義と家」の問題を、「共同体」の解体過程として

- (1) 幕末（岩手県旧煙山村）
- (2) 明治前半期（宮城県南郷町）
- (3) 大正期（岩手県大野、山形村、山形県西川町）
- (4) 昭和二十～三十年代（岩手県松尾村）

(5) 同三十～四十年代（宮城臭鳴子町）などを中心に報告したい。